知識量と障害説明の差異による態度の相違に関する研究

—自閉症スペクトラム障害に注目して—

○浅原梨絵¹・岩淵千明²

(¹川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科臨床心理学専攻・²川崎医療福祉大学医療福祉学部臨床心理学科)

キーワード：自閉症スペクトラム障害・説得的メッセージ・スティグマ

Study on relationship of attitude with the difference in quantity of knowledge and obstacle explanation

-Focus on autistic spectrum disorder -

Rie ASAHARA¹ and Chiaki IWABUCHI²

(¹KAWASAKI University Medical Welfare Graduate School of Health and Welfare Master's Program in Clinical Psychology,

²KAWASAKI University of Medical Welfare Clinical Psychology, Faculty of Health and Welfare)

Key Words: Autistic Spectrum Disorders, Persuasive Messages, Stigma

目 的

河内（1990）は、肢体不自由児・者に対する態度について大学生の専攻学科による比較をおこなった結果、専攻による違いを指摘している。これは、障害に対する知識量が関係しているのではないかと考えられる。しかしながら、スティグマに関する研究では、いまだで自閉症スペクトラム障害を持った人々について扱ってこなかった。

自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）に関する研究において、拓殖（2013）は学校現場におけるASD者への誤解と偏見の背景のひとつに「障害特性の問題」を指摘している。山根（2011）は障害告知時の説明の仕方によって、感情の生起が異なると指摘している。これらのことから、障害説明の方法によって障害者に対する態度に影響すると考えられる。

Hovland, Janis, & Kelly（1953）は、両面提示・片面提示という2種類のメッセージを用いて実験を行い、教養のある人には両面提示が効果的であり、教育程度の低い人には片面提示が効果的であると指摘した（Koyama et al., 2009）。これらのことから、障害説明の仕方によって、態度に影響を与えていると考えられる。

本研究では、知識量と障害説明の相違によって態度に与える影響が異なるかを検討することを目的としておこなった。

方 法

調査協力者 K大学の大学生320名を対象におこなった。その後、回答に不備があったものを除き、知識量の上位25%と下位25%を抽出した179名を分析対象とした。

調査時期 2015年1月におこなった。

調査方法 大学の講義時間を利用して質問紙を配布した。

質問紙構成 (1)ASDに関する知識：菊池（2011）の作成したものをを用いた。ASDに関する知識について、正または誤の2件法により回答を求める。(2)障害説明：佐々木・梅永（2009）から抜粋した。障害説明の条件によって、両面提示群・一面提示肯定群・一面提示否定群・統制群の4群に分けた。(3)態度尺度：Rose & Susan（2011）の架空事例の登場人物に対

する態度が障害告知の前後で異なるかを検討するため、下津ら（2006）の作成したLinkスティグマ尺度をASD者用に改変して用いた。回答は「全くそう思わない（1点）」から「非常にそう思う（4点）」の4件法で回答を求める。

結 果

架空事例の登場人物がASDであるという障害を告知する前後で、態度がどのように変化したのかを検討するため、2×4の対応のある分散分析をおこなった（表1参照）。

分析の結果、知識量（ $F(1, 171)=.01, n.s.$ ）、障害説明（ $F(1, 171)=42.40, n.s.$ ）の主効果は認められなかった。また、参加者内要因における態度の主効果は認められなかった（ $F(1, 171)=.07, n.s.$ ）。交互作用は態度と障害説明（ $F(1, 171)=3.34, p<.05$ ）のみ交互作用が認められたが、態度と知識量（ $F(1, 171)=1.57, n.s.$ ）、態度と障害説明と知識量（ $F(3, 171)=1.65, n.s.$ ）では認められなかった。次に単純主効果は、知識量の水準では片面提示肯定（ $F(1, 171)=8.31, p<.05$ ）にのみ有意差が認められたが、そのほかの群については認められなかった。態度の水準における単純主効果は、告知後の態度（ $F(3, 171)=3.00, p<.05$ ）に有意差が認められたが、告知前の態度（ $F(1, 171)=0.25, n.s.$ ）では有意差は認められなかった。多重比較では、知識量高群の両面提示群（ $F(3, 179)=1.08, p<.10$ ）、知識量高群の片面提示肯定群（ $F(3, 179)=3.00, p<.10$ ）、知識量低群の片面提示肯定群（ $F(3, 179)=5.39, p<.05$ ）において有意差が認められた。

考 察

これらのことから、障害説明の文章の提示の相違によってASD者に対する態度が異なることが明らかになった。また、障害説明では片面提示肯定群では知識量の多い人も少ない人も告知後に態度が正の影響を受けている。しかし、両面提示群では知識量の多い人のみ負の影響を受けていることが明らかになった。このことから、知識量の多い人に対しては、両面提示の文章を見せることでスティグマが低減されることが示された。

表 1 知識量と障害説明の相違による態度の平均（SD）および分散分析の結果（N=179）

知識量	知識量高群				知識量低群			
	両面提示	片面提示 肯定	片面提示 否定	統制	両面提示	片面提示 肯定	片面提示 否定	統制
告知前 態度	30.96 (4.23)	30.12 (6.56)	31.43 (3.22)	30.50 (4.12)	31.29 (3.55)	28.53 (5.19)	31.71 (4.14)	30.87 (4.60)
	29.18 (3.49)	30.89 (4.03)	30.39 (5.20)	30.60 (3.81)	30.22 (5.32)	28.62 (6.34)	30.96 (4.63)	31.14 (4.07)
F値	.64 [†]	2.96 [*]	.27	.59	3.86	5.39 [†]	2.47	.05

[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$